

国際シンポジウム「大学教育の国際化とは何か」

趣旨

グローバル化の加速する現代世界において、留学生は年を追うごとに増加し、研究者の交流も年々活性化している。これに加えて、大学ランキングの隆盛は大学教育の市場化に拍車をかけている。今や大学の国際化は教育者、研究者だけではなく、政財界の注視の対象ともなっている。

これに加えて、ヨーロッパでは 1999 年のボローニャ宣言にもとづき、欧州高等教育・研究空間が創設され、大学の国際化が進行している。しかしながら、この一連の大学改革は大学人に当惑をもたらしている。いったい大学の国際化とは、大学が外部の圧力を受けて進めざるを得ない現象なのだろうか。これは特に大学における言語という課題に現れている。大学は外国からの学生、教員、研究者を受け入れるために、どの言語を選択すべきだろうか。そこにはどのようなメリットやデメリットがあるだろうか。大学のキャンパスでは、1 つの言語だけを優先させるべきなのだろうか。それとも多言語主義を実践すべきだろうか。いずれの場合であれ、国語にどのような地位を与えることが望ましいだろうか。

言い換えると、グローバル化の時代において、大学はどのような言語政策を選択することで、学生の要望をかなえると同時に、高度な教育研究のレベルを確保することができるだろうか。大学の国際化とは、単に財政や経営の問題だけではない。これは、言語や文化の位置づけに関わる課題であり、コミュニケーションや教育言語にも関わる課題でもあり、その役割や地位を問いただすものでもある。

京都大学では、外国人教員 100 人計画に代表される大学の国際化が進みつつあり、さらにスーパーグローバル大学のかげ声も踊っている。しかし英語による授業の開講だけが国際化を意味するのか。この教育により国際化は進展するのか。そもそも大学の国際化とは何を意味するのか。

大学の国際化について、高等教育政策について寺島隆吉先生の見解を披露していただく。それをうけて、ヨーロッパの視点、英語とフランス語を事実上の公用語とするモーリシャスなどのケースを振り返り、京都大学の国際化を問い直す。

日時 11 月 24 日（月）15 時より

場所 京都大学人間・環境学研究科棟地下大講義室

プログラム

挨拶 京都大学 大学院人間・環境学研究科研究科長 高橋由典

司会 西山教行（京都大学）

基調講演（15:10-15:40）

寺島隆吉（元岐阜大学，国際教育総合文化研究所）「大学教育の「国際化」は「創造的研究者」「グローバル人材」を育てるか」

指定討論者：ジャン＝クロード・ベアコ

司会：塩塚秀一郎（京都大学）

休憩（16:00-16:15）

シンポジウム（16:15-18:00）

講師

ジャン＝クロード・ベアコ（フランス，パリ第3大学名誉教授，京都大学客員教授，言語教育学，欧州評議会言語教育政策顧問）「高等教育の英語化について—その動機，結果，代案，展望」

クロード・トリュショ（フランス，ストラスブール大学名誉教授，言語教育学，日仏会館招へい研究者）「言語政策の当事者としての大学の責任とはなにか」

ラダ・ティルヴァッセン（南アフリカ，プレトリア大学教授，日本学術振興会短期外国人招聘研究者，言語教育学）「大学の国際化と英語化は同じ意味か？」

大木 充（京都大学名誉教授）「京都大学の国際化と外国語教育」

司会：多賀 茂（京都大学）

全体討論

日本語とフランス語による討論，同時通訳付き

参加費 無料

懇親会 3000円

申し込みは11月21日まで，次のアドレスをお願いします。

jnn2480@gmail.com